

『業妙態論(村上理論)、特に「依正不二」の視点 から見た環境論その一』

A thought of environment - theory(1st step) in view of both 【Karma-mystic & inconspicuous transferring phase theory (= Murakami's theory)】 and 【Oneness of life and its environment】.

Tadayoshi MURAKAMI
Riseltosh Research Innovation Institute
E・mail : riseltos@krc.biglobe.ne.jp

村上 忠良
Riseltosh Research Innovation Institute
E・mail : riseltos@krc.biglobe.ne.jp

Abstract :

In 21century, especially, in these days, many scientific and or technological fields show world-wide new activities.

Particularly relating to the fields concerning with human-mind, with his consciousness, and with his creativity, the number of scholars who study the fields increase.

In spite of the fact, the value-studies for human-consciousness and karma particularly in its relation to environments are not so popular.

In this study-memory, I try to explain some problems of environments on the Buddhism-doctorin “依正不二 : Oneness of life and its environments”.

21世紀に入り、科学技術の分野で新しい動きが出て来ている。その中でも、人間の心や意識、創造性など、今までの研究があまり注力して来なかった分野を研究対象にする研究者数の増加が特に顕著である。にもかかわらず、人間の意識及び業と「文明」、特に環境（広義の）とに関連付けた評価研究は、あまりなされていない。本メモでは、仏教教義上の「依正不二」の概念を借りて環境論の問題点を述べる。

Keyword ; 科学技術、業妙態論、意識、環境、文明、依正不二

目 次

1. はじめに
2. 環境としての自然の猛威と、死に対する恐怖を「魔」と捉えた古代人
3. 業の思想
4. 現代科学、特に量子生物物理における「生命とは」の取り組み
5. 「依正不二」とその現代的な一解釈
6. 業妙態論（業思想と潜態&顕態思想）からの視点
7. おわりに

1. はじめに：

ここでは、今後の環境論と「総合知」との有機的議論の発展性を期待して、「創造と破壊」と文明の視点、「グローバル視点での人類の現代的共有課題の本質」について、総合知への前門としての「発明科学」の立脚すべき自然観構築の視点から、まず考えてみたい。

創造科学、創造工学などで言う「創造」は、一般に使われている様な意味、例えば、「創造と平和」、「創造あふれ、豊かで平和な社会」などでの「創造」と異なるように思われる。即ち、「創造」は、「創」と「造」を併せ含む意味を持っており、特にその前提を示す「創」は、元来、「倉」（音を表す）部と、（こすり付けて傷つける、削るなどの意味を表す）部とを有しており、「刀で切る、傷をつけることで、状況を変化させる」と言う意味を本質的に有すと思われる。このように「創造」とは、異質のものが互いに遭遇し、今までと異なる新たな「現象」をそこに「造」出すことだと考えられる。それ故、国際、業際、学際のように、「際」の状況と密接な関連性があるものとする。つまり、互いに異質のものが、その存在を賭け創生・転生する「場」を「際」として考えることも出来る。

ここに、現代グローバル視点での人類共通の課題の一つ、「生存」を、その生存する「場：環境」たる、地球・月・・・太陽系・・・宇宙との本質的関係性【法；法則；自然法則；宇宙法則；少なくとも、千年、万年、億年、・・・無限年において、成り立つ【法】を意味】において、考える「知」を「総合知」とする立場で、時空を超えてもその適合性がある、【法】の視点で論じてみたい。

さて、今より、約9000年程前頃から、即ちBC7000年頃からBC5000年頃には、中緯度の温帯地域は現代より摂氏1乃至2.5度程高い、所謂、クリマテック・オプティマムがあって、海水面が上昇した結果、特にメソポタミア南部では洪水層が普通に存在していることが次第に判って来た。シッパル、ニップルに加えて、ウル、ウルク、更にはキシユ等、メソポタミア南部の遺跡丘からもギルガメッシュ叙事詩と同類の粘土版が発見されてきた。

BC2800年頃にシュルパックに起きたとされる洪水の範囲には、「創世記」に記述のあるノアの住居があった。

一方、印度のインダス文明地域にも、この時期に対応して、同様な大洪水の形跡が見つかるが、交易を含む交流もあって、メソポタミアと同様な自然の影響のみならず、相互に人間・文化の影響を共有している形跡（ドラビダ人；土から生命；お地蔵さん；道祖神；・・・メソポタミア・・・旧約聖書；土から神が命を創造・・・）が伺える。このように実際は、我々が思っている以上に文化的にも、文明としても相互に長期に亘って、深く影響《参照；*【参考3】、【参考4】、【参考5】*》を与えていたのではないか。研究の価値は十分にあると思う。その痕跡の一つに、以下のことを指摘する文化人類学者もいるようである。

<各文明の交流は、予想以上に密であったのではないか…例>

1) 釈迦の母の名；マーヤ (Maya) 「摩耶」

イエスの母の名；マリヤ

2) 釈迦の名；シイダッタ (Siddhatta) 「悉達多」

イエスの名；ジーザス (Jesus:Jesus)

4) 釈迦の父の名；ジョーボンノー (Jobanno:Jobhane) 「浄飯王」

イエスに洗礼した；ヨハネ (Johane:Jobanni:John…ジョン)

5) ペルシャのゾロアスター教の「光と闇」（「明と暗」）、「善神と悪神」、「天国と地獄」などの二元対立的な概念が後にユダヤ教の中に取り入れられた（とする神学者、宗教学者も少数ながら存在）。

2. 環境としての自然の猛威と、死に対する恐怖を「魔」と捉えた古代人：

この大自然の同じ魔を逃れるのに、両文明地域とも、それぞれに神を発明したが、古代印度（先住民族；ドラヴィタ人、又はドラヴィタ言語使用民族グループ）はメソポタミアと違って、唯一絶対神の人格神に同化する立場をとらなかった。古代印度は、「魔」を「神」（「魔」神から「善」神へ）に転換（蘇生）する呪術、祈りを発明した。即ち、後に仏教で、「変毒為薬」、「煩惱即菩提」、「色即

是空」などにも通じる思考である。その後、征服統治者のアーリア人（広義には、アーリア言語使用民族グループも含める。）も次第に同化し、この文化をその習慣的に受け入れ参照；*【参考3】、【参考4】、【参考5】*》た。

以下に、「魔」を「善神」に変えた、または積極的に「善神」を**発明**した事例のほんの2、3の例を示す。

- 1) マハーカーラ (Maha kala) 「大黒天」(七福神の一つだが、その本質的実体は、憤怒を示す「神」で万物・生命の破壊者とされたもの；《マハー》・{カーラ}即ち、「《大》・{時}」の意味の通り、“時”は万物の存在を滅するものとして、恐れられたが、その本質的実態は漠然と、しかし、現実の生活の上で、現象上の事実として、誰もその“時”の流れに逆らうことが絶対不可能であると認識され、畏敬されていた。)
- 2) サラスヴァティ (Sarasvati) 「弁財天」(北部印度の河の名称が、次第に神格化されて、呼称され、後世に伝承されたもの；土地の豊饒作用、汚染浄化作用や、その他、五穀豊饒・罪障消滅の利益、などなど、アーリア系種族間の信仰対象神に対し、その神を勧請するための歌と弁舌、弁才が、その意味が形骸化して伝承・伝播して来たものが、弁財になり、その様な作用を有する化身として、弁財天となった。)
- 3) ヴァイシュラーヴァナ (Vaisravana) 「多門天または、毘沙門天」(バラモン期前においては、「魔」であった<Kuvera(クヴェラー)>と言ったが、後に善神になって、バラモン期以後には、施福財宝神に、さらに仏教に取り入れられて軍神となって、仏法の守護神となる)

この時、既に神を作用神（西洋の様な人格神、唯一絶対神などとは違って、自然も種々の働き、影響力、種々の能力・作用、を有する‘状態’であると認識し、その影響力・能力・作用力…など、これらの「力用」を恐れて、この「力用」を畏敬しての意味で、「神」と称したのである。更にその象徴として、便宜上具体的なイメージを描き易いものとして、擬人化、動物の化身のスタイルなどを選んだ。）として、捉えていたのではないか。その意味を受け継ぐ業 (Karma) は「造る」(Kr…) が語源で、作用・働きを伴った「動作、動き」すなわち、作用…振舞、動作（特に意思を持って行う動作、意思そのものおも含む行為）の中に災いを福に、魔を善神に転換する業 (Karma) に繋がる思考の萌芽が既に存在していたのではないか。

3. 業の思想：

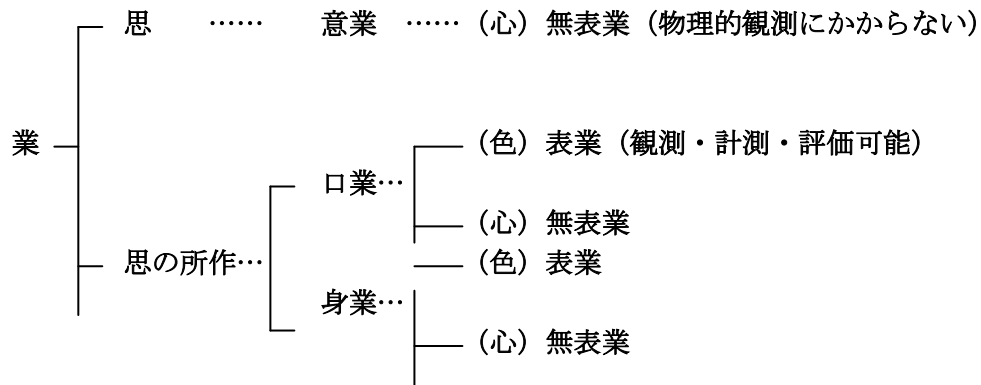
仏教上は、日常の一切の行為を「業」という。俱舍論に「世の別は業に由りて生ず、思及び思の所作なり、思は即ち是れ意業なり、所作は謂く身語なり」とある。

世の別（自然、人間社会を含む世の中に存在する差異、異同の認識可能なもの）は、現象面の全ての差別（差と別；他と区別、識別できる差異）、生命における種々の差別は、「業によって起こる」と。

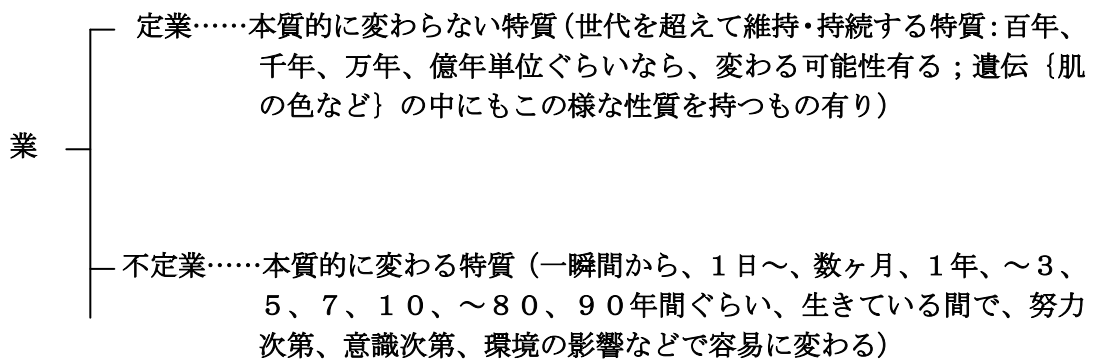
善悪（善；全ての生命的な存在をはぐくみ、育て、益する行為、悪；自己と他者の生命を傷つける行為）の行為が余習を残す報いとして、命に刻印され業として差別を生じる。

善の仏教上の典型的な定義は、天親の「唯識論」の中にある「能く此世、他世を順益するに為て、故に名ずけて善と為す」と。

3-1. <業の形態的構造> ;



3-2. <業の時間特性構造> ;



4. 現代科学、特に量子生物物理における「生命とは」の取り組み :

エルヴィン・シュレディンガーの言う「秩序ある量子論的な運動状態」が、マクロスケールまで起こり得る事例として「生命現象」を解釈しようとし、またシュレディンガーの示唆した「生命の本質」と解釈したのは、カナダの梅沢、高橋両博士であった。

生きた細胞の状態 (生命現象) と死んだ細胞の状態 (非生命現象) とを比較してみると、生きた細胞の細胞内外、細胞間隙を満たす“水”の電気双極子による“場”がダイナミカルな秩序を有して、超伝導状態の様な量子論的秩序状態がマクロスケールに出てきた現象と解釈出来るとした。

生命は、その構成物質を集団として、有機的連係的秩序状態を保持している。即ち、そのエントロピーが減少 (局所的に) する状態では生きられない。

ほとんどの生物がエントロピー減少状態を保つには、その食物は同じ状態 (ネグエントロピー増加状態) の食物、生物 (が望ましい) からしか摂れない。

なぜなら、生物は、常に細胞の内外を秩序状態 (単なる情報では、生命現象の本質的実態を把握できない。少なくとも生きている動的な情報エントロピー的状態での情報; 知、知恵?) で充滿しておかなくては生きていけないからである。

これが、生物が本質的に自己本位、利己的、欲望充足本位になり、他者、環境、自然との対立、不調和を生じる根本原因とも考えられるのではないか。

これを、仏教では、「業」(「ごう」、とも、「ぎょう」とも言い、それを敢えて自分の命の中に取り込み刻印する行為を『修業』と言う。) として捉え、それを貫く本質的流れを「法」: として見極め、認識論として、空・仮・中の三諦論と開示し、認識&実践論として「依正不二」へと展開して行った。

5. 「依正不二」とその現代的の一解釈 :

縦に時間性、横に空間性の広がりを持った自然観・生命観を有する「依正不二」は、中国の天台

がその論述著作の「摩訶止観」巻五、第7章の「正観章」において、「一念三千」を説いたとされ、その中で「三世間」（五陰、衆生、国土世間）を説いて、この「一念三千」を展開したとされている。

この「三世間」の内、五陰、衆生世間は**有情**（現代用語で生命体；仏法用語では、**情報取得評価処理体系を有する秩序体**）を意味し、国土世間は**非情**（現代用語で非生命体）を意味するもので、妙楽が「法華玄義」の「十妙」を解釈するため、釈籤に「十不二門」を立てたが、その第六が「依正不二門」である。

その中に、有情（生物）は、非情（自然構成物；素粒子、原子、分子、高分子、有機物、無機物、材料、国土、環境〔場；自然環境、社会環境、文化環境、情報環境など〕）によって、構成するとしている。

唯物論でもなく、唯心論でもなく、実存哲学でもなく、意識（生命）と環境（自然）の関係は、“生命の場”と“環境の場”との“相互作用場”そのものであり、この「場」をどの様に観るか、どのように対処するかが問題なのである。

日蓮が教示する弟子檀那への手紙には「**其れ十方**（四方、八方、及び上下の二方で十方；すなわち「主体」を取り巻く一切の空間的・時間的環境）は**依報**（環境世界）なり…**正報**（主観的・判断する生命体）**なくば依報**（その主体にとって、認識の対象となる、または、その主体にとって価値ある評価対象としての環境）**なし、又依報**（環境の材料【ソフト&情報、ハード】も含む）**をもって此れ**（正報：生命）**を作れり**」とあって、端的にその関連性を示している。

この意味は、**依報**は一切の環境であり、**客体**であり、**正報**とは、**衆生・生命の主体**を指している。また更に「**正報**は**体**のごとく、**依報**は**影**のごとく…」とあり、主体は体の如くであり、環境は主体から影の如く動かされ、働きかけられる。よって正報である主体がエゴで毒されていれば、その客体たる環境もその反作用として、主体に対し、エゴ剥き出しの状態、汚れた状態（悪の業を示す状態、悪神、魔）を現出するようになるのは、当然である、と論じているのである。

ちなみに、法華経の寿量品の中に「放逸箸五欲。墮於惡道中。」（放逸にして、五欲に執著すれば、悪道の中に墮ちる）とあり、

また、

- (1) 生・老・病・死 …… 有情
- (2) 生・住・異・滅 …… 有情&非情（大の四相{四有為相}：一生、小の四相：瞬間）
- (3) 生成・定住・変化・滅失 …… 非情（原子、素粒子、…）
- (4) 成・住・壊・空 …… 非情（原子、素粒子、…）

とある。

6. 業妙態論（業思想と潜態&顕態思想）からの視点：

6. 1 自然観と業妙態論の視点から；

業妙態論の視点から、異質のものが、その**全存在**を賭け**創生・転生する**機会の例を考えると、大自然の中では、陸地と水辺（川岸と川、海岸と海）、水汽（川と海と風と泡）、風と海、暖流と寒流、浅海（表層海）と深海、深海中熱水と周辺、・・・などが、その例として考えられる。日本は、火山（海底火山も）、地球内部のマグマ、地球中心部コア多階層の移動、大陸移動、地震、津波、台風等々、地球環境、天体環境・・・等々の「場」**《参照；*【図1】*》**があり、この「場」は、自然法則でいう、**【場；音場、磁場、電場、重力場、核子場、・・・場】**等々、「現象1」と「現象2」と、更には・・・「現象n」とが総合作用する「界；磁界、電界、・・・界；世界」の上位概念（同義の場合；場＝界の場合も含む。）と考えられる。

地球全体に生息する全生命体に、影響を与える状況を、依報（**【生命体＝正報】**に対し、影響を与える側＝報いを与える側＝周囲・環境状況）として、総合的に、本質的（数百年、数千年、数万年、数億年～数百億年で、普遍**【法】**として）に把握、理解せねばならない。

それは、特に現在、人間の自然環境に対する、作用力＝影響力が過大になって来た結果、**【法】**に準拠しているのか、**【法】**に違背しているのか、いや、当該**【法】**の特性自体から、そのような影響《自

己の行為【因】により生じた結果【果】、その報いを受ける【応報】のは、自然法則では当然の現象（＝因果応報）であることから、ここに銘記すべきであろう。

また、生命の生体現象そのものに、【法】という【レンズ】で観ることも重要である。生命体は多数の複合的パラメータを有して、有機的に複合的な連携活動形態を提示し、生体内外の情報を有機的に活用する「智」を有する、という【法】、即ち「法則」に則って生死現象を提示し、細胞膜の内外とで、常に攻防、協調、対話（情報のやり取り）などがあって、創造と破壊、即ち、生と死の現象を個々の細胞組織の上に繰り返し現出して、全体として調和・安定した組織体を維持している。これらの現象は、東洋思想の「成・住・壊・空」、「生・老・病・死」の、【法】＝「法：法則；自然法則」《参照；*【参考1】、【参考5】、【図3-①】、【図3-②】*》としての現代的解釈とその展開の可能性を示唆するものではないだろうか。そして、その生命の本質を理解するには、暗黙の前提として、「寿命」の概念、「時間」の概念、「流れ；循環；変化」の概念、志向・思考・意識&無意識・行為《参照；*【図1】、【図2】*》が有り、また局所的現象と統合的&統一的現象とは質的に非常に異なるとする立場をとること。そして、局所的現象を考察する場合、総合的&統一的に考察して、その現象の本質を見抜くことが重要だとする。このような立場から、単体としての生命（細胞）と、統一的秩序体の生命（生体、生命組織体）とでは、起こりうる現象もその様相も非常に異なる（多細胞の場合）ようになる。

6. 2 単体、秩序体としての現象の例；

細胞単体としての現象や、実験などからの知見と、統一的組織体（多細胞、高等植物など）としての現象の相違する様相の1例を、「粘菌」に見ることが出来る。即ち、細胞単体としての段階では、静的な植物的動きを示すが、増殖して集合体を形成する段階には、動的、有機的、統一的に秩序正しく、動物様の運動形態を示す。

また、高等生物を含む多細胞生物でも同様で、例えば、人の脳細胞をシャーレで増殖させても、実際の脳の機能とは次元の違うレベルである。このように、単体としての現象が、一旦、統一的秩序体を形成すると、今までと異なる様相を呈す。

6. 3 秩序体としての本質；

秩序体としての本質的現象の一つは間違いなく「寿命」、即ち、「生」と「死」を、一つの「法則」として、その秩序体の活動リズムの中に組み入れたこと（＝【業】として、秩序システムを獲得。）にある。

例えば、「アポトーシス」（細胞の自殺；細胞死）は、その例としては、受精卵が成長するに従い、親に似た形状・生体を形成しつつ、不要な部分の細胞を積極的に自殺させて誕生に備える。その最たるものが、創造性と知能活動を支える脳である。実際、ヒトを含む霊長類では、誕生の前後で、生命体（正報；主体）が周囲（依報；環境）の状況・情報の適性を認識・評価し、自己選別し、不適との判断された脳細胞が大量に死滅している。特に、生後1年ほどで全体の半分以上が細胞死し、大脳皮質に限っても100億個以上にのぼる。この「アポトーシス」は、統一的組織体の秩序維持の観点から、また免疫システムとも密接な関係を有している。

公害、環境破壊と言っても、その原因は人間が人間を取り巻く一切の環境全体（時間、空間に亘って、広範囲に因果の連鎖感応場；システム）で影響を及ぼしあっている、生命体【微生物、菌類、根粒細菌（豆類の根に・・・窒素固定作用）、真核生物、古細菌、細菌；リケッチャ；ウイルス、水生植物、陸生植物等の植物】が互いに交換して伝達するエネルギー&情報の循環の中で吸収・利用・活用・排出・転化・伝播できる量（時間当たりの処理能）を超えたもの<その結果、未処理量が蓄積増大化して、結局人間を取り囲むことになり、その根本因は、人間の欲望・煩惱の無制限の肥大化にあった【釈迦は2千数百年前に、すでにそれを指摘していた】>を文明【＝人間の欲望充足手段としての位相での文明】が要求していることに起因するものであると思う。

この文明が人間の欲望を表現し、その実現手段を人間の科学技術開発行為を介して創出・生産してきたことに環境破壊の淵源があると思う。人間の文明化の歴史は、畢竟、環境破壊の歴史でもあった。その典型的例が、発明・技術の歴史であり、特許制度《*参照；【図3-①】、【図3-②】、

【参考5】*》である。これが、故滝野文三博士が、特許制度を危惧していた点でもある。このように考えると、この自分も人間であり、他の人間と同様に環境破壊罪を有していたと結論せざるを得ないのである。

7. まとめ：

以上、述べて来たことから、環境問題（**仏法**：宇宙の**法則**：自然の自業自得の循環の**理法**）は、自然の循環の**理法**に無頓着な人間が自己の欲望を肥大化（自然の一要素たる人間が人間自身の自業自得の循環の**理法**を無視し、責任を取らないし、取れない・・・）し、**人間中心主義**《*参照；**【図3-①】、【図3-②】**》で来たことがその根本原因である。

言い換えれば、人間が自己の内から外へ出す一切のもの（物質、非物質を問わず）について、以下の、

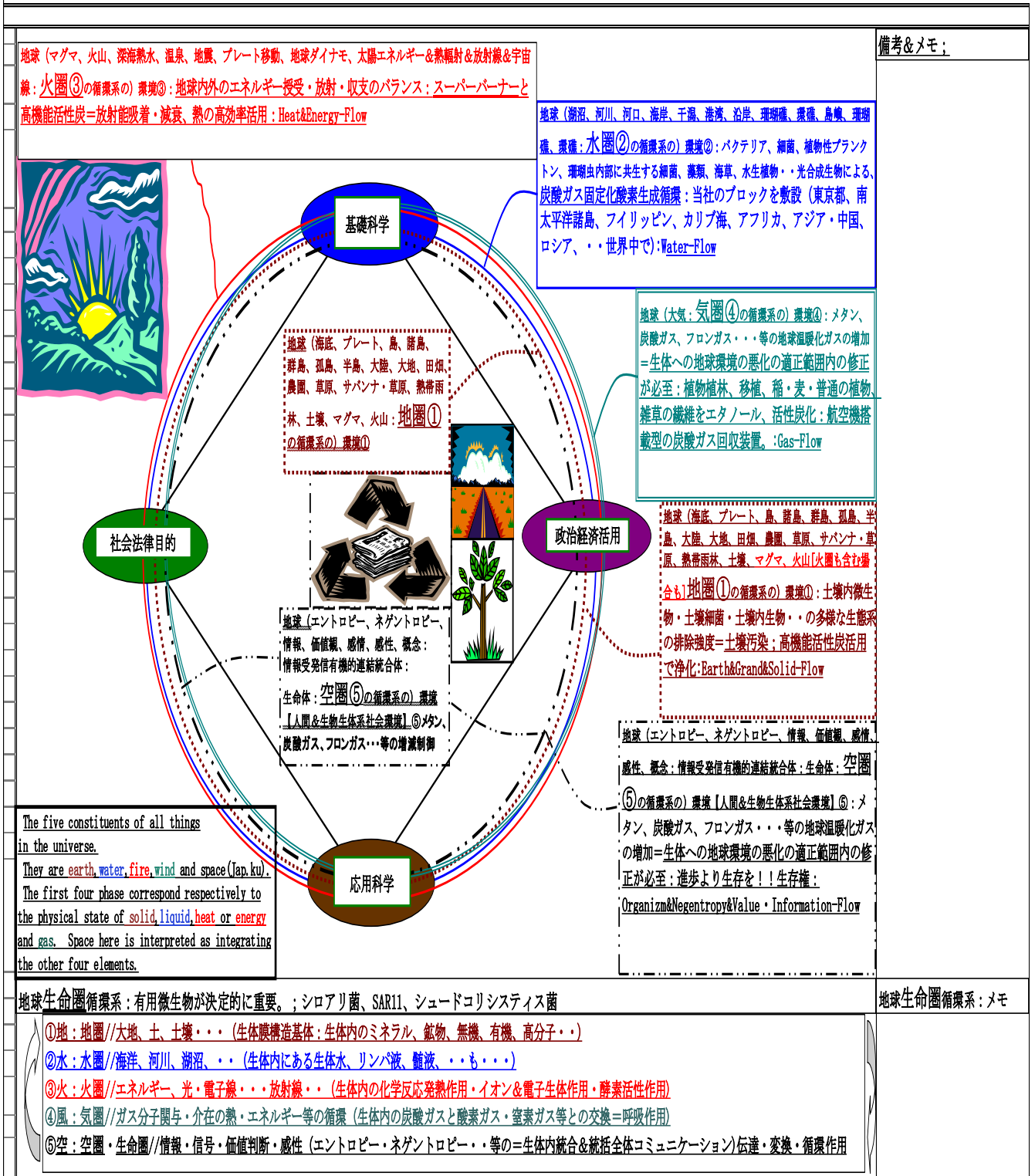
- (1) 生・老・病・死 …… 有情
- (2) 生・住・異・滅 …… 有情&非情（大の四相{四有為相}：一生、小の四相：瞬間）
- (3) 生成・定住・変化・滅失 …… 非情（原子、素粒子、…）
- (4) 成・住・壊・空 …… 非情（原子、素粒子、…）

につき、(1)～(4)すべてを考慮した「行動」を取れないこと、「依正不二」の**理法**意識の欠如行動に帰着するといえる。現状は非常に深刻で、人間総体の**叡智**を結集（**総合知；知恵**）して解決せねばならないところまで追いつめられていると考えるものである。

以上、今まで述べてきたことを、論理の飛躍を承知で、秩序体【**広義の生命体**】としての地球（環境循環システム；依報）と、生命体（あらゆる生物&生命体&生体素材；正報）に当てはめて、その**【総合作用場】**を、**【法：時空場で普遍的眞実性・統一性】**の視点で考えることは、重要である。今後は、更に、この観点から、論点を絞って、考えていく予定である。

Riseltosh Innovation Reserch Instituteのホームページ概念図 (イメージ図) 案

※発案者：村上忠良 (1965、70、75、78、85、90、99年；2001年2月10日作成の改訂版：①2007年4月13日、②2007年9月24日改定【オークションを想定して】)



【図 1】

3. 自然観、人間観と法概念の特異性①

■法①；**ダルマ** (印唯) … 創造主(神)を仮定しない；**法**は万物に**平等**に作用する。

法②；
 ↳ Law(英米) … 『lay』 (横たえる)のPP形 (神の選定**意思**による)
 ↳ Gesetz(独) … 『gesetzen』 (存在**たらしめる**)のPP形

創造主(神)の**意思**で配列されたもの。(メソポタミアをその源流?)

① **水・風；流れ・循環・無常・意柔軟** / **作用神(動)状態位相**

② **血・契約・生贖・忠誠心** / **嫉妬人格神(絶対静止中心点)**

● 神から**生命**の息吹を**吹込**(*inspire*)まれて、泥・土からこの世に；息に命が宿る(メソポタミア) … 息=生=靈魂=アトマン(インド；ウパニシャッド)=呼吸もの(大和)=氣(中国)=anima(ラテン語；*spiritus*) … ひらめき*inspiration*、精神&**生命**&酒(*spirit*)、神に捧げるのは**肉**であって(血はため；旧約聖書；今でも、最も厳密に規則を守るのは旧約の流れを汲むイスラム)

● 神に代って自然を**支配**する能力、**権利**を与えられた**選ばれた人、民**；**選民**思想

… **gift**才能、**genius**天才、**generate**産出す。 ➡ **ジョナカ；人権説・米国**

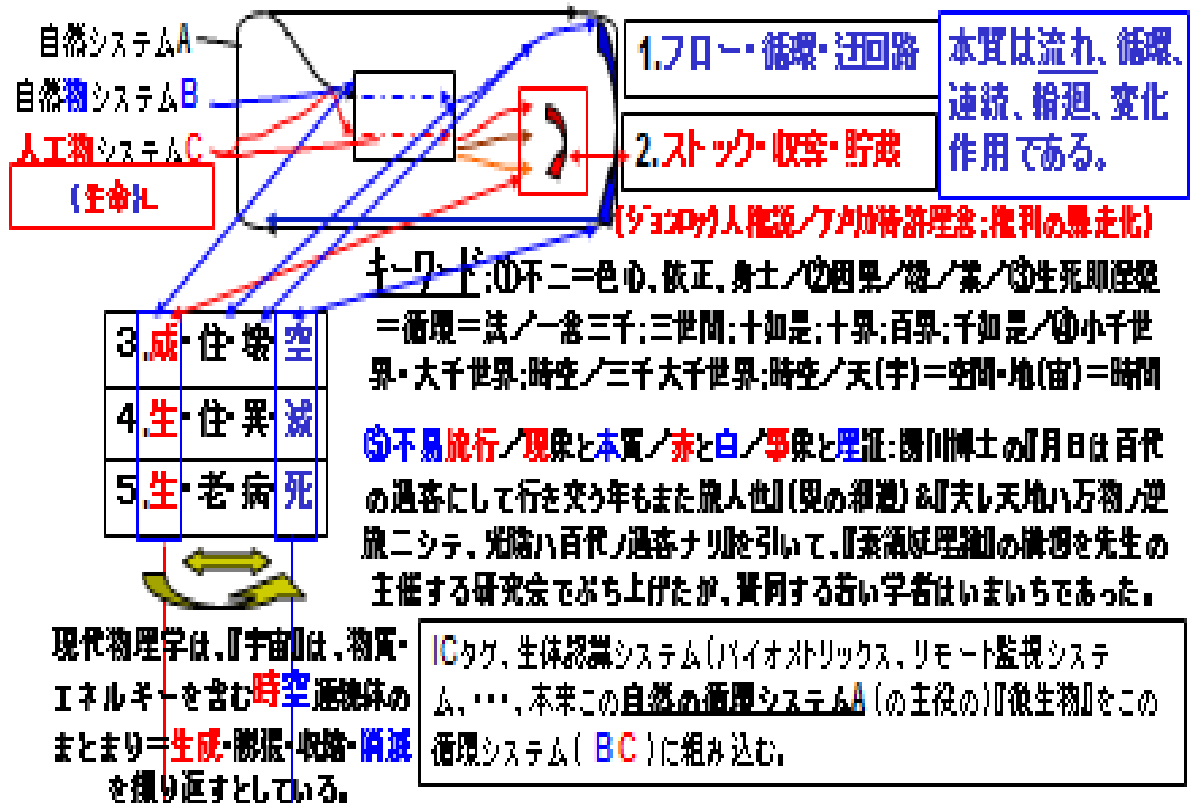
Antropo-Centri人間中心主義；自然を**自由に利用可**(村上陽一郎氏)

……自然法則を**利用**(ドイツ法[Kohler]；日本特許法)

【図3-①】

3.自然観、人間観と法概念の特異性②

■ 富・情報の流れ & 管理; 生命の流れ (意識の流れ)



3-② i. 生成・死滅(一対での生起と消滅が、連続)

2004/11/25

Proprietary to Tad Murakami,
Riseltosh Research Institute

8

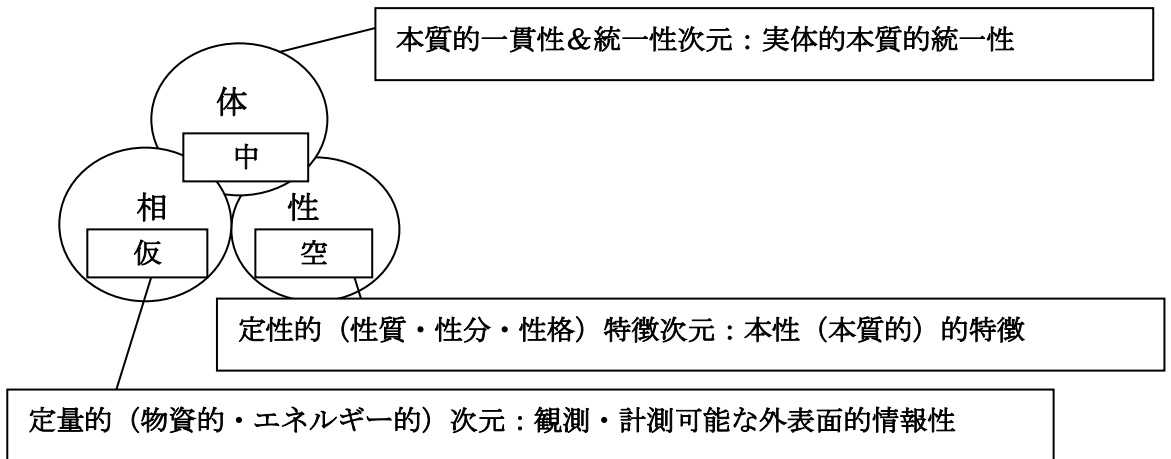
【図 3 - ②】

【参考1】:

〔自然法則〕: 自然現象の素連鎖、即ち、因 \longleftrightarrow 縁 \longleftrightarrow 果 によって、一切の千態万状の現象 (myriads of form in natural phenomena) を生じて、それを人が認識して得る、凝縮された最少かつ最高次の情報概念。

*** 三諦論 (空・仮・中) : 認識論 ***

実態的本質的統一性



【参考2】:

生命系 (非生物系、生物系を包含する高位概念系) の特徴とその相対的、技術的視点からの解釈

①非生物系 (非情体)	②生物系 (有情体)	③生命系 = ①+② (統合生命体)
<ul style="list-style-type: none"> 要素還元主義 分析手法 時間が可逆 平衡 (への移行現象) 安定へ、無秩序化へ 死 (仮死、停止、固定) 状態知 閉鎖系 (閉ループ) : 局所解 コンピュータ 行動: 行も動も外部より入力して、出力を得。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体統合調和主義 分析&演繹&統合手法 時間が非可逆 非平衡 (に揺らぐ) 秩序化へ 生きている動態知 開放系 (開ループ) : 全領域解 脳 行動: 行 (既知) を介して動 (新知) を生じ、経験知・アルゴリズムを得。 	<p>◎生・住・異・滅: 無始無終 (始原の特定不可; ただし方便として、理解に供するため、局所的に理論構成し、その世界で遊ぶことは出来る。)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>流れ・循環・転化</p> <p>⇕</p> <ul style="list-style-type: none"> エネルギーの エクセルギーの 情報の 物質の 時間の 知識の </div>

- 20世紀までのと、21世紀からの背景の相異:
 - ① 便利性、利便性 (それがあれば、便利) の20世紀から、
 - ② 必然性・必須の要請性: 社会科学・哲学・倫理学・宗教などとの統一基盤が要請さ

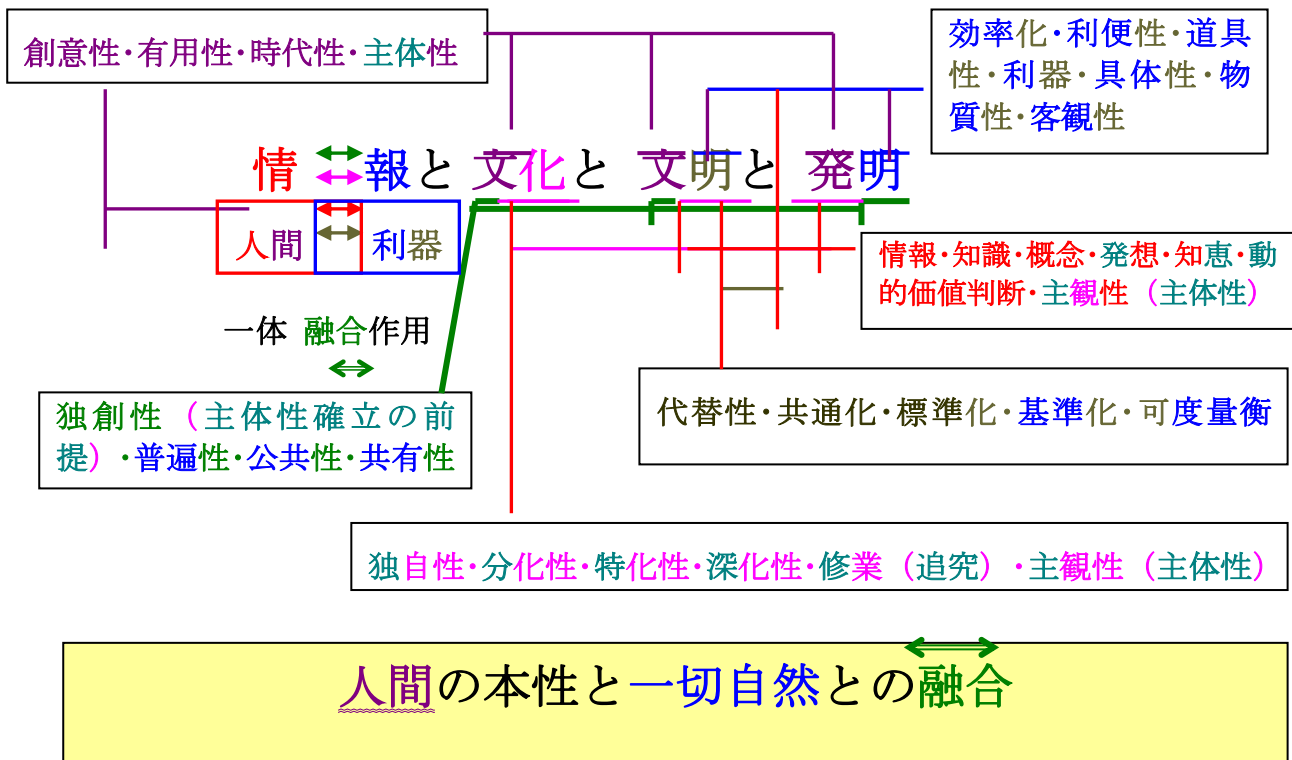


れる21世紀へ。

21世紀は、非生物系及び生物系を含む高位概念の生命系（統合生命）と同系の技術系への写像価値体系が本質的要請対象価値体系と成り得る時代である。

技術（の本質）とは、人間の本質に直結する。即ち人間の存在&欲望の本質を考究&追求し、各々の目標へ精進し欲望を昇華する姿勢（文化性）と、具体的効率的実現手段（文明性）とを有し、その環境（自然環境、社会環境、経済環境、人的環境）との間の総合作用場（時空間）にて、その正・反価値の価値評価を提示する具体的作用&具体的機能手段及びその被明示体そのものである。

【参考3】:



まず、情報とは陸軍少佐の酒井忠恕の翻訳した仏語の翻訳書『仏國歩兵陣中用務実地演習、軌典』の中にある、『reenseignement』の日本語訳として、「情報」。その意味は、「敵情の報知」または「敵情の報告」から、「情報」として軍事上の概念（記号、信号、暗号、情報、データ、風聞、便り、噂、記録なども含む概念）として定着。また、発明の特許出願明細書、は①権利情報【特許請求の範囲】、と②技術情報【発明の詳細な説明；実施例&図面】の両面の機能が有る、とされる。）、しかし、現在では、最初の意味より広く、多様な解釈がなされてきている。

1. その意味内容を信じて使う記号体系を・・・信号。
2. 特定のグループ間、特定の人間の間でのみ、約束したルール、意味で使用・・・暗号。
3. それを公開して、広く普遍的にAとBとが使用するのを前提としたもの・・・信号。
4. A；観測主体（人物）が、B；被観測物、観測対象物から得る情報をデータとする。
5. その他、人が表現するものは、すべて情報である。
6. 情報の特質の一つは、（ある状態や生命の）固定知（死んだ知；時間軸を停止した上での静的な知）であって、（ある状態や生命の）動態知（生きている、脈動している知；実時間上の動的な、生きて知）ではない。よって、生命の情報は、アプローチの仕方を間違えると、死んだ情報知（生きている状態の、実態の、生命を把握できない）になってしまう。
7. ここでは、情報と、知（知識；知識体系と知恵【ひらめき、発想、課題解決のベストソリューション

ション思案、動的な対環境課題解決発想・モデル提示行為など】とを、たて分けて、しかも関連付けて、論じる必要性あるものと思量する。

【参考4】:

《1》:

①文明; 要習得時間 t_2 = 相対減小志向 (= t_2 / T [= 本人の寿命程度]; t_2 = 数秒 ~ 1年 ~); 利便性・効率性・量的効果・収穫性追求指向

②文化; 要習得時間 t_1 = 相対増大志向 (= t_1 / T [= 本人の寿命程度]; $t_1 \sim T = 10 \sim 120$ 年); 考究性・本質性・深度深耕追求性・・・・質的效果指向

《2》:

①文化; 個別化、特殊化、独自化、異化、深化、抽象化、精神化、暗黙化などで、観点・価値観・自然観&宇宙観・生命観・価値観なども深い思考の方向へ志向 (前提に主体性の確立)。

但し、創造する側、享受する側、習得・維持・伝持・継承する側とではそれぞれ違う認識。

②文明; 普遍化、一般化、共通化、汎化、標準化、具象化、具体化、物質化、道具化、形式化、普遍的共通尺度換算性 (時間、金額、次元・単位【物理量、化学量、情報量・・・・】など) による、価値比較・意思決定なども浅い思考へ志向。

但し、創造する側、享受する側、習得・維持・伝持・継承する側とではそれぞれ違う認識。

文; 文そのものは、人、人間をその本質の一面を抽象化表示したものであろう。(2000年 by 村上忠良 著作)

【参考5】:

村上研究 (0) 位相: 「工」学; ... 「天」(自然法則; 科学) と 「地」(現実環境、現実

社会) を 「人知」 で結ぶ (適用、適応、応用する)。(東北大学の伝統;)

○ (1971年、村上は、九工大実験助手時代、量子論研究過程で研究開始。)

